

# 福岡県勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群の再検討

岩 本 崇\*

Reexamination about the Bronze Mirrors  
from Katsuura Minenohata Kofun Tumulus in Fukuoka prefecture

IWAMOTO Takashi

キーワード：勝浦峯ノ畑古墳、銅鏡、同型鏡群、後期倭鏡、倭の五王

## はじめに

倭の五王による南朝遣使にかかわるとされるいわゆる同型鏡群（小林 1962 ほか）の副葬開始年代については、古墳編年研究が進化した現在においても、なお見解の一致をみていない。その理解には大きく二説あり、第 1 説が須恵器でいう ON46 型式段階とする理解（川西 2004、上野 2013、辻田 2015）、第 2 説が TK208 ～ TK23 型式段階とやや新しくみる理解である（加藤 2014・2020、岩本 2017b）。

この見解の違いには、同型鏡群を副葬する千葉県祇園大塚山古墳の築造を ON46 型式段階としうるかが大きく影響するが、それと同等に重視されているのが福岡県勝浦峯ノ畑古墳の評価である（辻田 2015）。しかし、勝浦峯ノ畑古墳に副葬された銅鏡はいずれも破片資料であり、その具体的な内容と全貌の把握にはなお検討すべき点も多い。

こうした認識のもと、筆者は勝浦峯ノ畑古

墳出土鏡を再検討するなかで、報告書で示された副葬鏡の構成に変更を要することを確認した<sup>(1)</sup>。そこで本稿では、その成果を報告するとともに、冒頭に示した課題を解決するため、個々の資料の検討から勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群の年代的位置を明らかにする。

## 1. 勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群 をめぐるこれまでの認識

勝浦峯ノ畑古墳出土鏡の報告は、これまでに 2 度の正式な機会によりなされている（川述編 1977、池ノ上・吉田編 2011）。ここでは 1997 年の報告を旧報告、2011 年の報告を再報告として、2 回の報告時点での出土鏡にたいする認識を整理しておきたい。

### (1) 1997 年の報告（旧報告）

旧報告では埋葬施設の構造と副葬品の内容について、概要が記述されるにとどまる（川述編 1977）。出土遺物の一覧に、「鏡 7 面」

\*島根大学法文学部社会文化学科

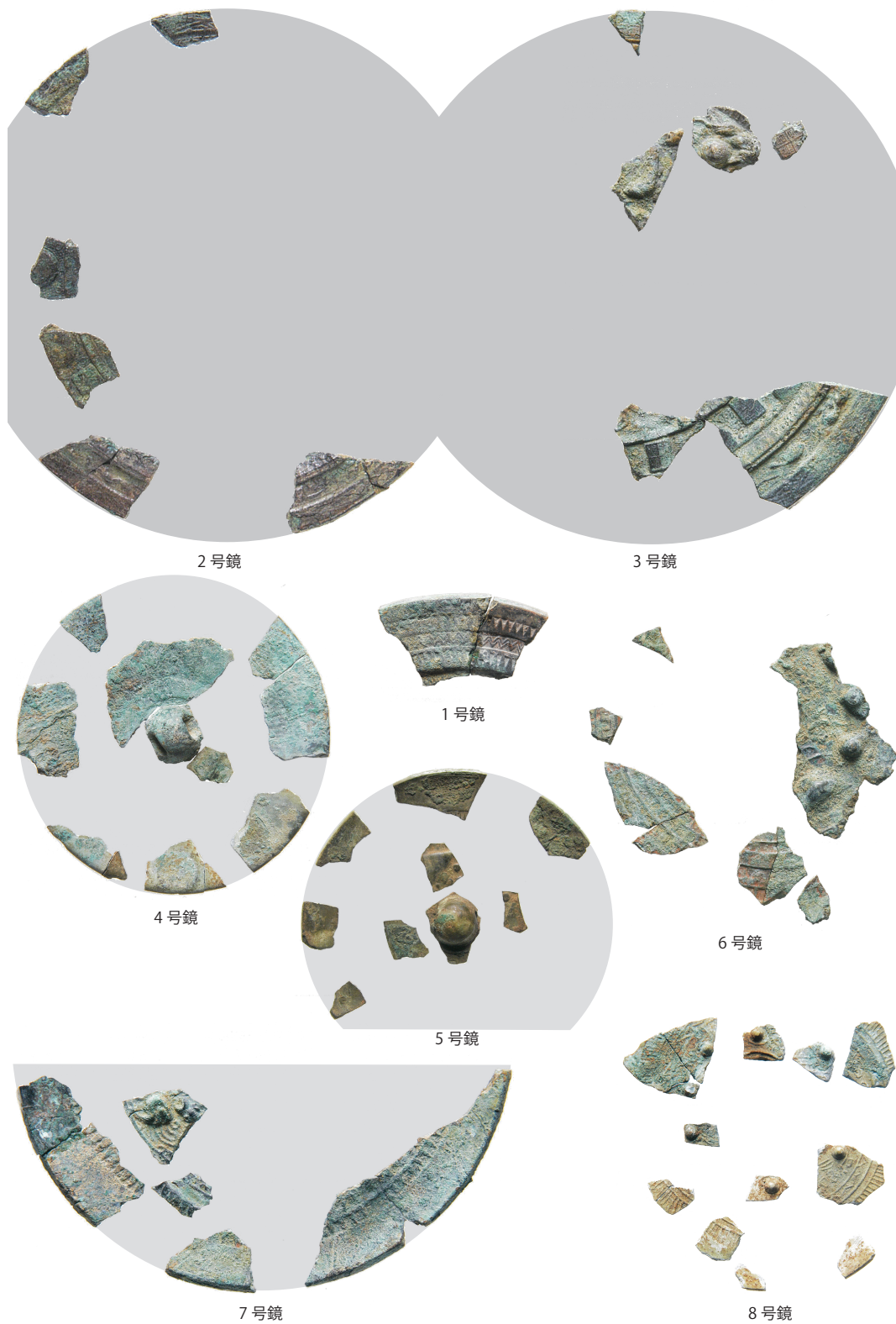


図1 再報告で示された勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群の内容

の内訳として「画文帯神獸鏡」、「内行花文鏡」、「珠文鏡」の名称が記され、図版に「画文帯神獸鏡」2面分、「神獸鏡」1面分、「内行花文鏡」1面分、「方格規矩鏡か」1面分の写真が掲載されている。旧報告によって鏡5面の存在とそれらのおおまな特徴を把握するが、それ以上の内容把握や個体数、副葬鏡の構成を検証することはできない。

## (2) 2011年の報告(再報告)

上述の旧報告では言及されなかった副葬鏡それぞれの特徴、ならびに鏡群の構成を把握することを意識しつつ、再報告では詳細な資料検討と記載がなされている(辻田2011)。その結果、勝浦峯ノ畑古墳から出土した鏡の総数は少なくとも8面であることが指摘されている(図1)。

個体識別は、文様構成の違いを基本として、銅質や鋳上がりさらには色調といった点にも配慮しつつ、きわめて慎重におこなわれたことが報告文からうかがわれる。ただし、報告文でも言及されている「多数の小片」の接合関係、さらには接点のない内区片と外区片の個体識別について検討の余地がないのかが気になるところである。

また、再報告では各鏡の位置づけについても言及されているが、いわゆる倭鏡の系列比定においてはここ数年の急速な研究の進展をふまえた再検討が必要であると考えられる。

## (3) 勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群の位置づけ

勝浦峯ノ畑古墳から出土した鏡群は、再報告を担当した辻田淳一郎によって、いわゆる同型鏡群の副葬開始の上限年代を決定する材料の一つとしてとりあげられている(辻田2015)。そこでは、勝浦峯ノ畑古墳の築造年代が前方後円墳集成編年(広瀬1991)の7

期(TK216～TK208型式期)に比定される点を重視する(辻田2015:249)。

しかし、勝浦峯ノ畑古墳から出土した埴輪は窖窯焼成で、外面調整をタテハケ主体とする川西V期に位置づけうる資料である(池ノ上・岸本2011:88)。また、埋葬施設の横穴式石室も、腰石と大型石材の使用からTK208型式期の新原・奴山1号墳をさかのぼることはないという(池ノ上・岸本2011:89)。勝浦峯ノ畑古墳では、鉄鏃や馬具に石室や埴輪の時期より古相を示しうる資料が含まれるが、それらを初葬時の副葬品と限定し、古墳の築造年代を遡上させるような再報告で示された時期比定の手続きには注意が必要と考える(e.g.池ノ上・岸本2011)。なぜなら、副葬品には製作から副葬に至るまでの時間幅に個々の不定性が想定されるため、古相を示す副葬品の時期に古墳の築造年代を固定しうるわけではないからである。鏡の副葬年代にしても、まずは出土した各鏡の年代を確認し、全体の構成を把握したうえで絞り込む必要があるだろう。

## 2. 勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群 の個体識別と構成

本章では、勝浦峯ノ畑古墳から出土した銅鏡について試みた再検討の結果を報告する。今回の実見によって、旧報告と再報告において認識されていなかった新たな破片の接合関係を5面の鏡において確認し、個々の鏡の文様構成について新たな知見を得た。また、個体の識別と同定の根拠が新たに得られたことをうけて、副葬鏡群の構成にも変更が生じることとなった。そして、この再検討の成果を第三者によって検証可能とするだけの材料を提示しておく必要があると考えたことが、本

表1 勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群の構成

鏡番号	川述 1977	辻田 2011	本稿	直径(cm)	位置づけ
1号鏡	方格規矩鏡か	細線式獣帯鏡	細線式獣帯鏡	23	同型鏡群
2号鏡	画文帯神獣鏡	画文帯同向式神獣鏡	画文帯同向式神獣鏡	21	同型鏡群
3号鏡	画文帯神獣鏡	画文帯同向式神獣鏡	画文帯同向式神獣鏡	21	同型鏡群
4号鏡	内行花文鏡	内行花文鏡 (6花文)	内行花文鏡Ⅲ系 (6花文)	9.7	前期倭鏡
5号鏡	—	内行花文鏡 (5花文)	(4号鏡および8号鏡の破片)	—	—
6号鏡	—	獣像鏡 (同向式神獣鏡B系?)	獣像鏡B系ないし鳥頭獣像鏡系	14.5	後期倭鏡古段階
7号鏡	神獣鏡	獣像鏡 (旋回式獣像鏡系)	獣像鏡B系	14	後期倭鏡古段階
8号鏡	—	乳文鏡	乳脚文鏡Ω字文系	8.5	後期倭鏡新段階
その他	—	—	倭鏡 (7号鏡と同一個体の可能性あり)	不明	後期倭鏡古段階?
合計数	7面	8面	7面 (8面の可能性もあり)	—	—

〔凡例〕直径は破片資料につき、参考値とする。1～3号鏡は同型鏡からの推定値、そのほかは残存部位からの復元値である。

稿を執筆するに至った理由である。

以下、個体ごとの特徴を詳細に記述することで個体識別の材料を提示し、それをふまえて出土鏡群の数と構成を明らかにする(図2～4)。なお、結論を先取りすることとなるが、本稿で確認した個体と鏡式(系列)名について、旧報告・再報告との対応関係を整理した結果を表1として掲げる。鏡の個体番号は再報告で与えられたものを基本的には踏襲することにしよう。

### (1) 個々の出土鏡の特徴と個体の識別

**1号鏡** 外区内側の鋸歯文帯に範傷が2ヶ所あり、その位置関係の一致から細線式獣帯鏡の同型鏡であることを確定できる(辻田2011:40)。範傷の一つは川西宏幸の「細線獣文鏡」にみられる傷cに該当する(川西2004)。

平縁の外区片であり、外区文様は外側から鋸歯文-複波文-鋸歯文である。鏡面と外区上面を丁寧に研磨し、縁端面も研磨するが端面中ほどの凹部に研磨のおよばない部分がある。外区上面と縁端面の境界を弱く面取りする点が個体を識別する特徴となる。

**2号鏡** 文様の一致から、画文帯同向式神獣鏡の同型鏡と判断できる。川西宏幸の「画文帯重列式神獣鏡C」に該当する(川西2004)。再報告では、画文帯同向式神獣鏡の

同型鏡が2面存在する点が同一部分となる文様の重なりから実証されるとともに、厚みや鑄上がり、銅質などから個体識別がなされた(辻田2011)。画文帯同向式神獣鏡にかんしては、本稿でも再報告の所見を妥当なものとして踏襲する。したがって、2号鏡に該当するのは再報告で示された6片とみる。

破片ごとの説明については、再報告にくわしいのでここで述べることはしないが、2号鏡は厚みがなく、文様の表出は3号鏡より良好である。外区の菱雲文帯の上面、界圏の上面を研磨するなど、3号鏡との違いがある。

**3号鏡** 2号鏡とは同型で別個体の画文帯同向式神獣鏡(「画文帯重列式神獣鏡C」)である(川西2004)。再報告では6片が3号鏡を構成する破片として示され(辻田2011)、今回の再検討で写真下の左側の方格を含む破片(再報告の破片e)に接合する内区片を確認した。

3号鏡についても、各破片の詳細は再報告に委ねるが、全体に厚みがあり、文様の表出があまい。2号鏡でみられた外区の菱雲文帯の上面、界圏の上面の研磨がみられず、鑄放しに近い状態を呈する。

**4号鏡** 6花文の内行花文鏡系倭鏡として復元されている。文様構成にたいする認識には変更がないが、外区片に新たな接合関係が判明するとともに、後述するように5号鏡と





1号鏡



4号鏡



2号鏡



6号鏡



3号鏡



7号鏡

図2 勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群（1）

されてきた内区片を4号鏡と同一個体とする点から、全体の様相をよりくわしく把握しようようになった。

中心の鈕は直径1.7cm、鈕孔は長方形を指向するが全体に丸みを帯びた形状である。鈕の外周には幅5mmほどの圈帯がめぐり、その外側に6花文が割り付けられる。花文間の中軸の内側と外側に珠文を配し、内側の珠文の両脇に1つずつ圈帯に沿って珠文を置く。花文間の珠文数は4である。内区主文部の外側には櫛歯文帯が配され、さらに素文の外区へと至る。薄い平縁である。

文様は全体に不鮮明であり、各部の形状は丸みを帯びる。直径は9.7cmに復元される。

**5号鏡** 5花文の内行花文鏡系倭鏡として復元されているが、内区片1点が別に保管されていた破片と接合し、花文の内側に圈帯のめぐり文様構成となることが判明した。その圈帯の幅、花文間の珠文の配列、不鮮明な文様の表出が共通することから、5号鏡としてあつかわれてきた内区片は、いずれも4号鏡と同一の個体を構成するものと判断できる。

この認識の変更にともない、5号鏡とされる鈕片と外区片をみなおすと、それらは内区片と異なって、丸みのないシャープな形状をとどめる点が異質といえる。鈕には成型痕ともみられる条痕が表面に遺存するほどである。少なくとも、鈕片と外区片は4号鏡と同一個体にならないことが明らかである。なお後述するが、鈕片は8号鏡の破片と接合関係を確認できる。同様に、外区片についても、形態的な特徴から8号鏡と同一個体を構成するものとみておくのが妥当であろう。

以上のように、これまで5号鏡とされてきた破片は、4号鏡および8号鏡と同一個体になるものと判断しうる。

**6号鏡** 内区主文部から外区にかけての破

片であり、残存状況から4乳で区画した内区主文部に主として獣像を配する文様構成をもつ例とみられる。外区から内区外周部にかけての文様構成は、外側から鋸歯文-鍵形文-鋸歯文-櫛歯文となる。内外区の境界に段差はなく、施文基盤面は連続する。わずかに残る縁部は、匙面をなす斜縁と判断される。

残存状況から鈕径は2.5cm以下、鏡径は14cm以上となることがほぼ確実視され、想定される外区幅を考慮すれば14.5cm程度に復元できるであろう。

**7号鏡** 外区から縁部を中心とした複数の破片が確認される。厚さが近似する6号鏡とは異なる表現をもつ獣像の配された内区片が、同一個体をなす破片と推定される。

内区主像となる獣像は顔面を正面観とし、腰および脚部の表現が残る。内区主文部の外側には1条の圈線を介して無文部があり、さらにその外側が肥厚して外区との境界となる。肥厚部分には鋸歯文が配される。外区文様は肥厚部分までの外側からの構成が、鋸歯文-鋸歯文-無文-無文-鋸歯文に復元される。ただし、破片の遺存状態から、外区文様帯の外側から2帯目の鋸歯文とその内側の無文部分の連続性については、不確実であるかもしれない。縁部は匙面を呈する斜縁である。

直径は14cm程度に復元される。

**8号鏡** 乳脚文鏡系倭鏡である。5号鏡としてとりあつかわれてきた鈕の破片が、8号鏡の破片と接合するとともに、このたび未報告を含めた破片資料に多数の接合関係が確認されたことにより、全体の様相と細部の特徴がほぼ判明した。

中心の鈕は径1.5cmと小ぶりであり、鈕座は円圈座である。鈕座の外周には内区主文部があり、円錐形の乳によって7ないし8区画される。乳にはΩ字形の囲みが付属し、囲

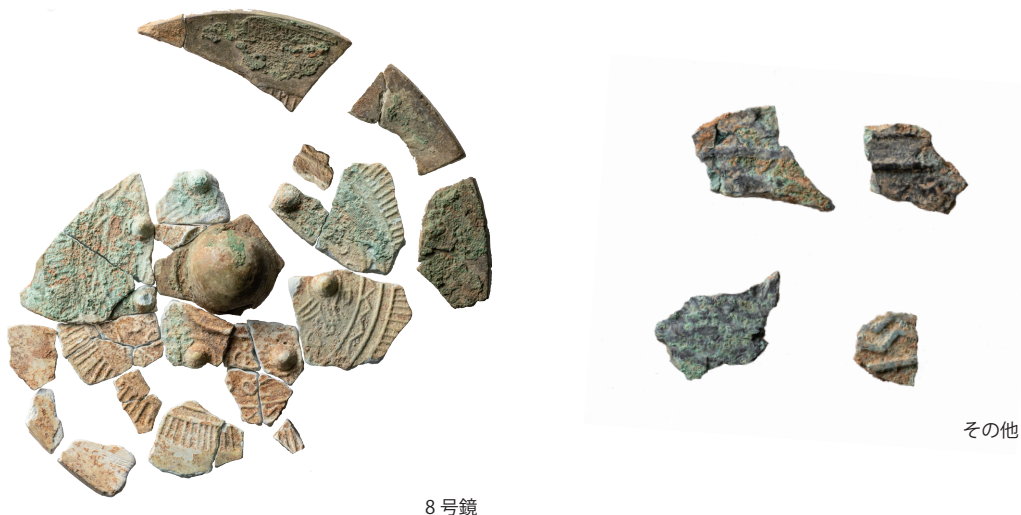


図3 勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群（2）

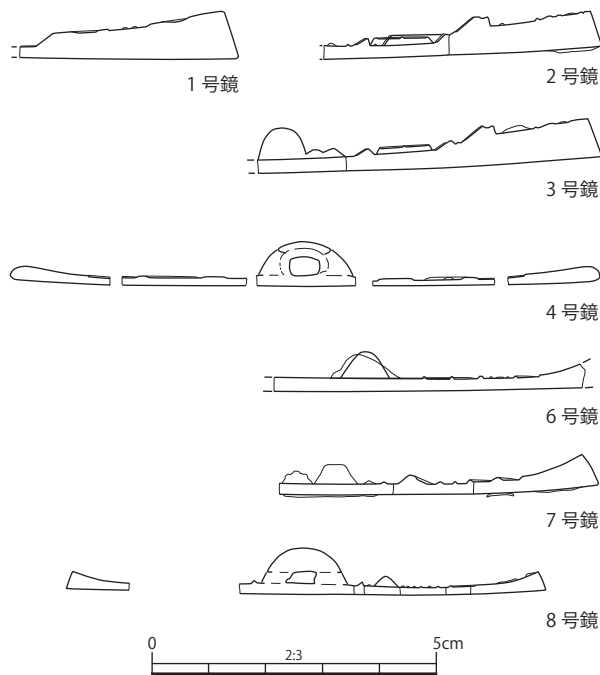


図4 勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群の断面図

みが開放する部分に短い脚が細線で表現される。さらに周囲には蕨手文様が多数配される。1条の圏線を介した内区外周部は、外側から櫛歯文帯-無文帯-単線の波文帯とする。さらに外側の外区は無文であり、均一な反りをもって縁端面へと厚みを増す。

直径は各部文様帯の幅から 8.5cm に復元することが可能である。

**その他** このほか、上記のいずれとも特徴が一致しない破片が少なくとも1面分存在する。これに該当する破片は少なくとも4片あり、3条の複波文の外側に鋸歯文が配される

外区文様とおぼしき破片である。厚さは1.5～2.0mm弱である。ただし、7号鏡については外区の文様構成に不確定な部分を残すため、これら4片が7号鏡と同一個体となる可能性を完全に排除することはできない。

## (2) 副葬鏡群の数と構成

前節で各個体の特徴にくわえて、個体識別の根拠もあわせて確認したところ、勝浦峯ノ畑古墳から出土した鏡として確実視できる数量は7面であり(1・2・3・4・6・7・8号鏡)、可能性としてさらに1面(その他)、合計8面の存在を想定できる。

その内訳は、1～3号鏡がいわゆる同型鏡群、4・6～8号鏡とその他が倭鏡に該当するものとみられる。次章では、副葬鏡群の年代的な位置を明らかにするため、とくに倭鏡の編年的位置づけを検討する。

## 3. 勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群の年代的な位置

冒頭にも述べたとおり、いわゆる同型鏡群の年代については、統一見解が得られていない。この課題を克服するには、同型鏡群を含む鏡の量的副葬例における組み合わせの内容を検討し、とくに同型鏡群と古墳時代倭鏡の併行関係を吟味することが解決に至る一つの道筋になると考える。

### (1) 倭鏡の年代的な位置

今回の再検討によって、勝浦峯ノ畑古墳には個体の内容をおおよそ把握しうる倭鏡が4面存在することが明らかとなった。そこで、これら倭鏡の年代的な位置を確認することにした(図5)。

**4号鏡** 6花文の内行花文鏡系で、外区を素文として内区の内側に圈帯をめぐらし、花

文間の珠文を4個とする例はそう多くない。出土古墳の年代が明らかな例としては岡山県浅川3号墳例(図5-1)をあげうる程度である。浅川3号墳は、筒形銅器からその築造年代の上限を古墳時代前期後半古相(広域編年IV期)としうる(e.g. 岩本2018b)。

また、内区内側の圈帯を省略した例としては奈良県赤尾熊ヶ谷2号墳例があり、さらに花文間の珠文を減じて3個にしたとみられる例には香川県快天山古墳例や大阪府壺井御旅山古墳例などがある。省略型式とみられる鏡(図5-2)が快天山古墳や壺井御旅山古墳といった前期後半古相(広域編年IV期)の古墳に副葬される点を考慮すると(e.g. 岩本2018b)、4号鏡の製作が前期後半古相を降る可能性は低い。

いずれにせよ、4号鏡は古墳時代前期を中心に製作された前期倭鏡に位置づけられる(岩本2017a)。

**6号鏡** 主像表現が部分的にしか残存していないため系列比定が困難だが、胴部の前後を乳のような膨らみで表現する点などは、奈良県新沢115号墳の対置式神獸鏡B系の獸像と共通し、奈良県一楽古墳や福岡県久泉下牟田古墳から出土した鳥頭獸像鏡系とも通じるところがある。再報告でも注目された外区文様にみる特徴的な鍵形文が栃木県雀宮牛塚古墳の獸像鏡B系(図5-3)にある点とも整合的である(辻田2011)。対置式神獸鏡B系の獸像は、獸像鏡B系や鳥頭獸像鏡系の獸像と表現が共通するなど互換性がみとめられ、これらは後期倭鏡古段階として把握できる(岩本2017a)。辻田淳一郎は6号鏡を後期倭鏡新段階に属する旋回式獸像鏡系や同向式神獸鏡B系に近いものとするが(辻田2011)、獸像鏡B系ないしは鳥頭獸像鏡系に比定しうると考える。





1. 内行花文鏡〔前期倭鏡〕(岡山・浅川3号墳)



2. 内行花文鏡〔前期倭鏡〕(香川・快天山古墳)



3. 獣像鏡B系〔後期倭鏡古段階〕(栃木・雀宮牛塚古墳)



4. 獣像鏡B系〔後期倭鏡古段階〕(三重・志島12号墳)



5. 乳脚文鏡系〔後期倭鏡新段階〕(静岡・愛野向山B27号古墳)



6. 乳脚文鏡系〔後期倭鏡新段階〕(奈良・豊田山採集)

図5 勝浦峯ノ畑古墳出土倭鏡の対比資料



**7号鏡** 内区主像の獣像をおおよそ把握でき、その表現は三重県志島12号墳や栃木県雀宮牛塚古墳の獣像鏡B系(図5-3・4)、奈良県割塚古墳の対置式神獣鏡B系と共通する。したがって、7号鏡も後期倭鏡古段階の獣像鏡B系ないし対置式神獣鏡B系に比定しうると考える。なお、辻田淳一郎は7号鏡を旋回式獣像鏡系に該当する例とみるが(辻田2011)、旋回式獣像鏡系には7号鏡と同じ獣像表現をもつ例が存在しないことから(岩本2018a)、上記したように獣像鏡B系か対置式神獣鏡B系と理解すべきであろう。

**8号鏡** 乳の周りにΩ字形の囲みが付属する乳脚文鏡であり、短い脚が細線で表現されるタイプである。同様の特色をもつ例には、静岡県愛野向山B27号墳例や伝和歌山県岩橋千塚古墳群例、奈良県豊田山採集例がある(図5-5・6)。8号鏡の内区主像の空隙に細線の渦文を充填する特徴は豊田山例のほか、乳脚文鏡ではないが内行花文鏡髭文系に関連するとみられる宮崎県西都原265号墳例にも通じる。

これらは、後期倭鏡新段階のなかでも相対的に古相に位置づけられる資料である(加藤2017・2020)。また、同じ後期倭鏡新段階の旋回式獣像鏡系の外区断面形式を参考にすると、1・2式に相当することから、後期倭鏡新段階でも古相に比定しうると可能性が高い(岩本2018a)。8号鏡も外区2式に分類されることから、やはり後期倭鏡新段階古相の所産であると考えられる。

## (2) 鏡群の構成と年代的位置

前項の検討によって、副葬された4面の倭鏡が、前期倭鏡1面、後期倭鏡古段階2面、後期倭鏡新段階1面からなる構成であることが明らかとなった。副葬鏡群としては、ここ

にいわれる同型鏡群が組み合うこととなる。したがって、副葬鏡群に想定される年代幅の下限は、後期倭鏡新段階によって規定される。別稿で検討したとおり、出土古墳の年代からは、後期倭鏡新段階の副葬は、須恵器型式というTK208～TK23型式期に始動する(岩本2017b)。とすれば、後期倭鏡新段階の鏡を含む勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群はTK208～TK23型式期以降に副葬されたものである可能性が高いことになろう。

もちろん、勝浦峯ノ畑古墳では、前期倭鏡と後期倭鏡古段階の鏡が含まれているため、同型鏡群が「伝世・長期保有」を経て副葬された可能性も考慮しておく必要がある。また、再報告で想定される後期倭鏡新段階に先行する時期に初葬を想定する余地も完全には排除しきれない(池ノ上・岸本2011)。しかしながら、勝浦峯ノ畑古墳の副葬鏡組成からは、「伝世・長期保有」や追葬に先行する時期の副葬を前提とした同型鏡群の年代的な位置づけを積極的におこなう根拠はみあたらないと考える。むしろ、先に述べた埴輪や埋葬施設から想定される年代と、出土鏡群のまとまりから想定される副葬年代はきわめて整合する点を重視すべきである。

## 4. 勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群 の評価から波及する論点

### (1) 古墳副葬鏡様式としての評価

冒頭においていわれる同型鏡群の副葬開始年代に二説があり、第1説がON46型式段階説(川西2004、上野2013、辻田2015)、第2説がTK208～TK23型式段階説(加藤2014・2020、岩本2017b)であることを述べた。須恵器型式とその時期的関係というフィルターを介するため、この二説の違いは

伝わりづらいものの、古墳時代倭鏡の様式区分との対応関係からとらえなおすとその差はけっして小さなものではない。筆者の倭鏡様式区分でいうと、第1説は後期倭鏡古段階の副葬時期に、第2説は後期倭鏡新段階の副葬時期に併行することとなるからである(e.g. 岩本2017a・2017b)。

したがって、同型鏡群の副葬開始時期にたいする認識のずれによって、それと併行する古墳時代倭鏡様式の時期が変わることとなる。それは、ひいては古墳副葬鏡様式のとらえ方にも影響をおよぼすことにもなる。

## (2) 東アジア史における古墳時代の評価

倭の南朝遣使にかかわるとされる同型鏡群の副葬開始時期についてのわずかな認識のずれは、古墳時代を東アジア史のなかで把握するうえで多大な影響をおよぼしかねない。

倭の五王をめぐる議論については、文献史学による研究成果との接合が不可欠となるが(川西2004、辻田2018)、同型鏡群の倭への搬入時期と分配時期のわずかな位置づけの違いは、考古資料としての同型鏡群がもつ歴史的意義を大きく左右することになる。それゆえに、その出現年代を限られた資料によってのみ絞り込むことには慎重を期する必要があると考える。

## おわりに

本稿では勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群の再検討をとおして、その副葬鏡群としての年代的位置づけについて議論を試みた。その結果、勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群の副葬時期については、須恵器型式でいうTK208～TK23型式期に比定するのが妥当であることをあらためて述べた。

こうした本稿の見方を是としてよければ、同型鏡群の副葬開始年代の第1説を支える考古資料は、千葉県祇園大塚山古墳のみに限定されることとなる。しかも、祇園大塚山古墳の副葬品群の时期的な評価についてはON46型式期に固定することには躊躇をおぼえるところがある(e.g. 橋本2013ほか)。つまり、第1説を支持するには、資料が著しく不足している状況にある。

いっぽうで、勝浦峯ノ畑古墳出土鏡のなかでも倭鏡の構成をみなおすと、その主体をなすのが筆者の様式区分でいう後期倭鏡古段階であることにも一定の注意を払っておく必要がある。副葬年代はもともと新相を示す後期倭鏡新段階の資料やそのほかの副葬品、さらには埴輪の年代によって明らかにしうが、鏡には「伝世・長期保有」が散見され、勝浦峯ノ畑古墳出土鏡もその例に漏れない。勝浦峯ノ畑古墳の同型鏡群が本来的にどの倭鏡と組み合うものであるかを結論づけるには、資料に即した検討をさらに継続し、関連資料についての知見を蓄積する必要がある。

## 付記

本稿作成に際し、資料所蔵機関である九州歴史資料館、実見にご対応いただいた福津市教育委員会の井浦一氏、田上浩司氏に御礼申し上げます。関連資料の実見に際しては、河合忍氏、金田善敬氏、河野正訓氏、藤原郁代氏、古谷毅氏、三好元樹氏、岡山県古代吉備文化財センター、志摩市教育委員会、天理大学附属天理参考館、東京国立博物館、袋井市教区委員会、丸亀市教育委員会からご配慮を得た。末筆ながら記して謝意を表す。本稿はJSPS 科研費19H01340の成果を含む。

註

(1) 福岡県勝浦峯ノ畑古墳から出土した銅鏡の実見は、2020年7月28・29日に福津市歴史資料館において実施した。

引用文献

池ノ上宏・岸本 圭 2011「1.勝浦峯ノ畑古墳について」『津屋崎古墳群Ⅱ 勝浦峯ノ畑古墳』福津市文化財調査報告書第4集 福津市教育委員会 pp.86-89

池ノ上宏・吉田東明(編)2011『津屋崎古墳群Ⅱ 勝浦峯ノ畑古墳』福津市文化財調査報告書第4集 福津市教育委員会

岩本 崇 2017a「古墳時代倭鏡様式論」『日本考古学』第43号 日本考古学協会 pp.59-78

岩本 崇 2017b「古墳時代中期における鏡の変遷—倭鏡を中心として—」『中期古墳の現状と課題—広域編年と地域編年の齟齬—』中国四国前方後円墳研究会第20回研究集会 中国四国前方後円墳研究会 pp.9-20

岩本 崇 2018a「旋回式獣像鏡系倭鏡の編年と生産の画期」『古天神古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会 pp.73-90

岩本 崇 2018b「副葬品と埴輪による前期古墳広域編年」『前期古墳編年を再考する』六一書房 pp.137-148

加藤一郎 2017「乳脚文鏡の研究」『古代』第140号 早稲田大学考古学会 pp.43-79

加藤一郎 2020『古墳時代後期倭鏡考—雄略朝から継体朝の鏡生産—』六一書房

川西宏幸 2004『同型鏡とワカタケル』同成社

川述昭人(編)1977「2第41号墳」『新原・

奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書第54集 福岡県教育委員会 pp.38-41・PL.57-61

小林行雄 1962「古墳文化の形成」『岩波講座日本歴史1』岩波書店 pp.233-272

辻田淳一郎 2011「1鏡」『津屋崎古墳群Ⅱ 勝浦峯ノ畑古墳』福津市文化財調査報告書第4集 福津市教育委員会 pp.40-44

辻田淳一郎 2015「古墳時代中・後期における同型鏡群の授受とその意義—山の神古墳出土鏡群の位置づけをめぐる—」『山の神古墳の研究—「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に—』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室 pp.248-262

辻田淳一郎 2018『同型鏡群と倭の五王の時代』同成社

橋本達也 2013「祇園大塚山古墳の金銅装眉庇付冑と古墳時代中期の社会」『祇園大塚山古墳と5世紀という時代』六一書房 pp.57-83

広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社 pp.24-26

図表出典

図1 池ノ上・吉田(編)2011より引用。

図2～4 九州歴史資料館蔵。

図5 1. 浅川3号墳(岡山県古代吉備文化財センター蔵)、2. 快天山古墳(丸亀市教育委員会蔵)、3. 雀宮牛塚古墳(東京国立博物館蔵)、4. 志島12号墳(個人蔵)、5. 愛野向山B27号墳(個人蔵)、6. 豊田山採集(天理大学附属天理参考館蔵)。

表1 岩本作成。